



横井家の人々（大正の初め？）



横井和子

この度「市史編纂だより」に寄稿の御依頼があり、お役に立てるかどうか思案いたしましたが、横井大平、横井玉子が顕彰されました。際等に資料の大切さを痛感して参りましたので、身内のお話も御参考にならうかと存じ、お引受けいたしました次第でございます。系図（2ページ参照）でごらんの通り私は今の立場になろうとは考えておりませんでしたので、先祖のものは公の場で研究に役立てて頂き、永く大切に保存して頂くよう念願して参りました。私は大正九年に父直興と母清子（土族本多家）の間に生まれました。その頃祖父時雄は西園寺公望、珍田大使等に同行、講和条約締結のためパリにおりましたが、初孫が生まれると聞き大変喜びまして男の子なら「時和」と名付けるよ

うにと申しておりましたそうでございます。祖父は帰朝後、脳溢血で倒れ半身不随となりました。晩年の八年間、私と二歳下の弟時靖は大変可愛がられた思い出がございます。日中は大きい籐椅子で、動く方の手で身ぶりをしながら面白いお話をしてくれて私達はまつわりついで甘えました。夜は寝床に入る前、祖母が身体拭く傍らで肩や背中をたたいて上げるのが常でした。私達の小さい手のことを「もみじがきた」といって喜んだ祖父の温かい肌のぬくもりが今も伝わってくる様に感じられます。祖父にとっても、日糖事件など波乱の多い生涯の最後に与えられた安らぎの時であったのではと思つております。

祖父時雄に関してはお問い合わせが海外からもあつたりいたします。著書翻訳等の多くの資料が今治の柳瀬家で戦災で焼失したとの事で、

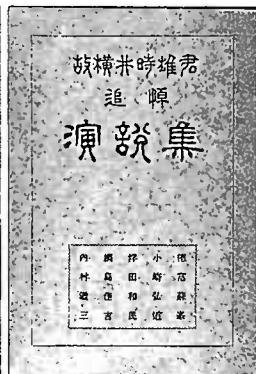
市史編さんだより

横井家の人々の思い出（一）

編集・発行
熊本市
新熊本市史編纂委員会
熊本市手取本町 1 の 1
市史編纂課
☎ 328-2038・2903

目 次

▽横井家の人々の思い出（二）	1
▽熊本町の揚酒本手	3
▽熊本におけるラジオ・テレビ放送	4
▽熊本に帰化したオダカユウレイグモ	5
▽日誌抄	6
▽河尻神宮祭典考	8
▽史料調査にご協力いただいた方々	
▽刊行年次計画	
▽編集後記	
	10	10



横井時雄・豊の結婚式
記念写真（明治22年）
と追悼演説集

仲々すべての時期について明らかになりませんが、手許に父の末弟で柳瀬広と養子縁組をした存伯父が書き残している略歴がございます。存伯父は祖父が脳溢血で倒れた時も同席しており、熊本にもよく伺い、心にかけていたと思われます。また、時雄の先妻峯（新島襄の妻の妹）と一緒に生まれた平馬も、母の実家山本家の養子となりました。晩年の消息は絶えており、人づてに不幸な一生を送られたと聞き、胸痛む思いがいたしております。

二人の若い日の立派な姿をお目にかけ偲んで頂きたいと存じます。

（以下次号）

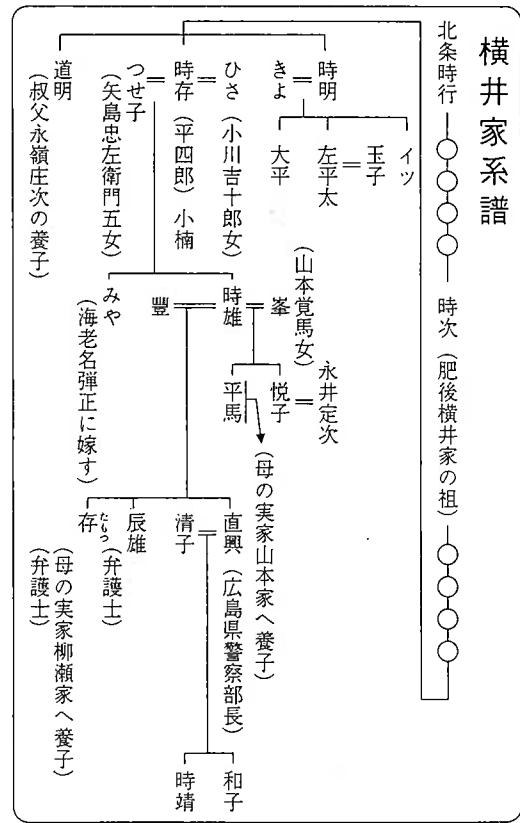
（注）横井大平は昭和二十八年、玉子は平成六年にそれぞれ熊本県近代文化功労者として顕彰された。

柳瀬存氏による時雄の略歴

横井時雄氏略年表

（横井家の記録による）

安政四年	一二月一日、肥後国下益城郡沼山津村に生まれる
明治四年	熊本洋学校入学、ジエーンスより英語普通学を修め、八年卒業
同九年	熊本バンド参加、開成学校入学、翌年退校
同一〇年	京都同志社入学、一二年卒業
同一二年	この年より二七年まで基督教教傳道に從事する
同二三年	欧米漫遊、翌年帰朝
同二七年	再び海外へ、主として哲学、史学専攻、二九年帰朝
昭和二年	九月一三日、永眠



熊本町の揚酒本手



近世専門部会

城後尚年

揚酒本手とは酒小売鑑札である。

「宝曆二年揚酒本手印鑑帳」(永青文庫蔵)によつて、熊本町の揚酒本手について紹介する。

本帳は元禄二年より明治三年までの揚酒本手の発給台帳にある。記載上の特色を列挙すると、

①熊本・川尻・高瀬・高橋・八代(五ヶ町)と御侍中寺社支配、御郡中に分類する。
②宝曆十一年以前では、熊本町の揚酒本手には年次順ではない。
③宝曆十一年以前では割印・認印の押印はない。
④宝曆十一年より安永二年までは割印のみを押印している。
⑤安永三年以後は割印・認印共に押印している。
⑥発給理由の記載は少なく、精粗が目立つ。
⑦安永四年以後は引継(継続)がみられる。

下表は熊本町において元禄五年以後に発給された揚酒本手の人数と本数を示すものである。この表でみると、宝曆十二年以後の人数・本数共に増加する中で、特に寛政年間以後の町、町役人層、新座・本座の者の急激な増加が目立つ。この町では元禄五年(新坪井八百屋町二本、本坪井新町十七本)から元禄七年(小山善十郎名義)以後延べ四四町、二九九本がゆるされているが多くは発給理由は記載していない。発給理由を明記する町名と理由を列挙すると、今京町明和元年・同七年、三本、会所

熊本町の揚酒本手													
町(町会所を含む)	町役人		新座		本座の者		町人		計		町人のうち		
	町名	本数	人数	本数	人数	本数	人数	本数	人数	本数	人数	本数	人数
元禄5~宝曆11 (1692~1761)	3 (1.8%)	20 (31.7%)	1 (5.3%)	- (1.6%)	- -	- -	15 (72.9%)	42 (66.7%)	19 (100%)	63 (100%)	永代5 一 一 一 一 一 一 一 一 一	- - - - - - - - - -	
宝曆12~天保8 (1762~1788)	9 (9.0%)	22 (13.5%)	12 (12.0%)	15 (12.0%)	16 (16.0%)	18 (11.0%)	63 (61.0%)	108 (65.3%)	100 (65.3%)	163	58 (53.7%)	27 (25.0%)	
寛政元~文政12 (1789~1829)	28 (10.4%)	110 (25.2%)	65 (24.2%)	75 (26.0%)	70 (18.5%)	81 (39.4%)	106 (39.1%)	171 (34.4%)	269 (39.1%)	437	51 (29.8%)	99 (57.9%)	
天保元~明治3 (1830~1870)	44 (8.2%)	147 (20.0%)	107 (16.0%)	119 (35.6%)	100 (28.8%)	214 (36.3%)	194 (35.4%)	263 (35.4%)	535 (41.0%)	743	27 (10.3%)	226 (85.9%)	
計	84 (9.1%)	299 (21.1%)	185 (20.0%)	210 (25.8%)	276 (14.9%)	313 (22.3%)	378 (41.0%)	584 (41.5%)	923 (41.5%)	1406	178 (30.5%)	352 (66.3%)	

〔揚酒本手印鑑帳〕(永青文庫蔵)より作成

立証文を差出すことで弘化元年まで継続して七本がゆるされている。これらの町や会所の本手は別当が保管したようである。

町役人層(別當・丁頭・肝煎・物書・薦頭)についてみると、

別當	元文3年	出
京町で三本	がゆるされ、	がゆるされる
寛政九年以後は在勤中	にゆるされた。	にゆるされた。
延十六	人、一十五本。	人、一十五本。
文化四年、万三丁目と	丁頭	丁頭
中古町懸三千目で各一		
本・一代限りゆるされ、		
天保年間以後は十年を		
限りゆるされている。		

町人では、享保十四年より宝曆十一年までに永代免は一人(五本)で、他はすべて一代限りゆるされ、以後は三十年以上の出精で十年限り、四十歳以上の出精で、一代限りゆるされている。

延二七六年・三三本。

町人では、享保十四年より宝曆十一年までに永代免は一人(五本)で、他はすべて一代限りゆるされ、以後は三十年以上の出精で十年限り、四十歳以上の出精で、一代限りゆるされている。

これらの本手発給の理由をみると、寸志によることが多く、由緒・勤功・孝心によるものもみられる。勤功によるものとして徒刑小屋用闇や廻役が強まり、永代免はなく、一代限りは減少し、十年限りが急激に増加する。

これららの本手発給の理由をみると、寸志によることが多く、由緒・勤功・孝心によるものもみられる。勤功によるものとして徒刑小屋用闇や廻役が強まり、永代免はなく、一代限りは減少し、十年限りが急激に増加する。

揚酒本手は貸与が認められた。また名儀人の死亡や年限が済めば返納し、印鑑帳では抹消した。再度願い出れば引継(継続)は認められた。寸志による場合は、あらたに寸志を差上げた。

揚酒本手は領域にひらくみられる。中でも内牧手永には「宿駅(サ)往還修復料」、「端辺往還出小屋助成」、「中村・正院手永では御茶屋修復料」としてゆるされている。

人、十七本。肝煎法之節立宿受持中」として二本・二十年がゆるされている。延十五五年高麗門町で「御刑

五年高麗門町で「御刑」として二本・二十年がゆるされている。延十五年高麗門町で「御刑」

五年高麗門町で「御刑」として二本・二十年がゆるされている。延十五年高麗門町で「御刑」

五年高麗門町で「御刑」として二本・二十年がゆるされている。延十五年高麗門町で「御刑」

五年高麗門町で「御刑」として二本・二十年がゆるされている。延十五年高麗門町で「御刑」



現代専門部会

熊本市におけるラジオ、テレビ放送

牧野洋一

一、熊本市におけるラジオ放送

日本のラジオ放送は大正十四年三月二十二日に始まつた。同年六月一日に大阪放送局が仮放送を始め、七月十二日には東京放送局で、七月十五日には名古屋放送局で本放送が開始された。翌年には社団法人日本放送協会が組織され同協会九州支部が熊本市練兵町早野ビル内に昭和二年五月二十一日に設置された。翌年六月十六日に清水町大字亀井字灰塚四八六に熊本放送所が完成して熊本放送局は開局した。当時の受信契約数は二二、六八二であつた。同年五月十六日に組織変更に伴い熊本中央放送局と改称した。同年九月一日に熊本中央放送局は第二放送を開始した。

民放は中部日本放送の同二十六年九月一日開局が最初であるが、同二十八年十月一日にラジオ熊本（現、熊本放送）が開局した。九州ではラジオ大分（現、大分放送）、ラジオ南日本（現、南日本放送）が同日に開局。同六十年十一月一日にエフエム中九州が開局した。

二、熊本市におけるテレビ放送

昭和二十八年二月一日にNHK東京テレビ局は本放送を開始した。九州ではNHK福岡放送

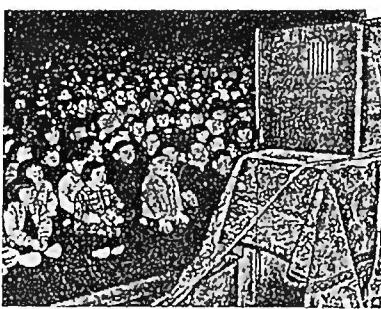
局のテレビ開局が同三十一年三月二十一日で最も早い。三十一年夏に発表された「経済白書」に、「もはや戦後ではない。回復を通じての成長は終つた。今後の成長は近代化によつてささえられる」と記される。県内ではすでに同三十一年度に数件のテレビの契約があつた。熊本市は一件であるが、阿蘇郡小国町では三十六件、同郡南小国町では二十件の契約である。福岡放送局のテレビの電波を受信していたのである。

NHK熊本放送局は同三十三年一月二十二日にテレビ放送を開始した。開局記念プログラムは午後〇時十五分から野村NHK会長の挨拶、田中郵政相の祝辞のあとに観光紹介映画「熊本・鹿児島」が全国に中継放送された。熊本のテレビ開局は全国で十六番目、九州では同三十一年三月福岡、三十二年五月小倉、三十三年二月熊本、鹿児島の順番であった。

開局したNHK熊本テレビ局は、映像出力一キロ、音声出力〇・五キロで第九チャンネルの周波帯を用い、七時半から十時まで毎日放送された。熊本のテレビ開局は全国で十六番目、九州では同三十一年三月福岡、三十二年五月小倉、三十三年二月熊本、鹿児島の順番であった。

開局したNHK熊本テレビ局は、映像出力一キロ、音声出力〇・五キロで第九チャンネルの周波帯を用い、七時半から十時まで毎日放送された。

開局日の記念祝



（昭和二十三年 熊本日日新聞撮影）

賀パレードは、公会堂から御幸坂一帯に集合した参加団体の列が花火を合団に行進を開始し、同じ頃福岡県立つたジェット機築城基地から飛び立つた。

昭和二十九年四月一日にはテレビ熊本（TKU）、同五十七年四月一日には熊本県民テレビ（KKT）、平成元年十月一日には熊本朝日放送（KAB）と熊本ケーブルネットワークが開局した。同四十四年四月一日にはテレビ熊本（TKU）、同五十七年四月一日には熊本県民テレビ（KKT）、平成元年十月一日には熊本朝日放送（KAB）と熊本ケーブルネットワークが開局した。

また、NHKと民間テレビ四局がカラーテレビの本放送を開始したのが昭和三十五年九月十日、NHKが衛星放送を開始したのが、同六十年七月四日であり、今や情報・娯楽のためにテレビはなくてはならない存在となつてゐる。

熊本城上空に姿を見せ、地上と空の圧巻がテレビですぐさま実況中継されたのである。

三、テレビの普及

昭和三十一年度、つまり熊本放送局がテレビ放送を開始（昭和三十三年一月二十二日）した年度の県内のテレビ契約件数をみてみよう。熊本市一六二四、八代市三五一、荒尾市八九、水俣市七八、山鹿市七八、玉名市七一、本渡市六五、小国町五六、鏡町四二、天水村三九、大津町三八、南小国村三四となつていて、テレビ開局から急速にテレビが普及しており、特に熊本市の普及が注目される。

テレビの普及がいかに急であったかは、同十三年度の契約件数をみれば、一層明らかである。熊本市七五五三、荒尾市一四九六、八代市一一六五、玉名市三〇〇、山鹿市二二二、水俣市二一六、本渡市一七八、宇土市一六五、菊池市一六〇、人吉市一五一、鏡町一三〇、大津町一一七、天水村一一六、小国町一一〇となつてゐる。県内の市部でテレビは急速に普及していくことがわかる。

テレビの普及に拍車をかけたのは民放テレビの開局である。同三十四年四月一日にはラジオ熊本テレビ（RKK）がまず開局した。同四十四年四月一日にはテレビ熊本（TKU）、同五十七年四月一日には熊本県民テレビ（KKT）、平成元年十月一日には熊本朝日放送（KAB）と熊本ケーブルネットワークが開局した。

また、NHKと民間テレビ四局がカラーテレビの本放送を開始したのが昭和三十五年九月十日、NHKが衛星放送を開始したのが、同六十年七月四日であり、今や情報・娯楽のためにテレビはなくてはならない存在となつてゐる。

熊本に帰化した オダカユウレイイグモ



自然専門部会
入江照雄

国内では、昨年は例年なく、重大な事件や事故に関する話題が多かった。そのような中で、十一月には、もともと日本に生息しない毒グモが近畿地方で見つかり、テレビや新聞を大いに賑わせた。

クモと聞いただけでも鳥肌の立つ人が多い。なぜか、昔から昆虫よりも毛嫌いされてきた動物である。しかし、クモは害虫を退治してくれると有益な動物であることも忘れないで欲しい。毒グモや害虫といえども、人間が勝手に悪者扱いしているだけで、当人たちは地球上の生き物の一員として、一所懸命生きているに過ぎないのが……。

私は、十年くらい前からユウレイイグモの仲間の分布と生態に興味をもち、日本をはじめアジアの各地を調査している。ユウレイイグモは、屋内外の暗所や洞窟の入口などにすみ、家屋では天井や床下の隅に不規則な棚状の網を張る。このような場所を探せば、比較的容易に発見できる。実は、テレビや映画の時代劇でお馴染みの床下や倉のクモの巣は、ほとんどイエユウレイグモ(次ページ写真2)の網である。

さて、オダカ(尾高)ユウレイイグモだが、ユ

ウレイイグモの一種で、体長が六ミリ前後であるのに対し、脚の長さは五五ミリと非常に長い(写真1)。このクモは、最初インドで発見され、その後バキスタン、ネパール、タイ、台湾および中国など、アジアの熱帯から亜熱帯にかけての広い地域から記録されている。温帯域の日本に、本種が生息することは予想もしなかった。しかし、愛知県蒲郡市で一九八一年に最初に発見され、現在まで、北は近畿地方から南は石垣島まで分布していることがわかつてきた。熊本県でも、一九九〇年八月に八代市で私が初めて確認した。

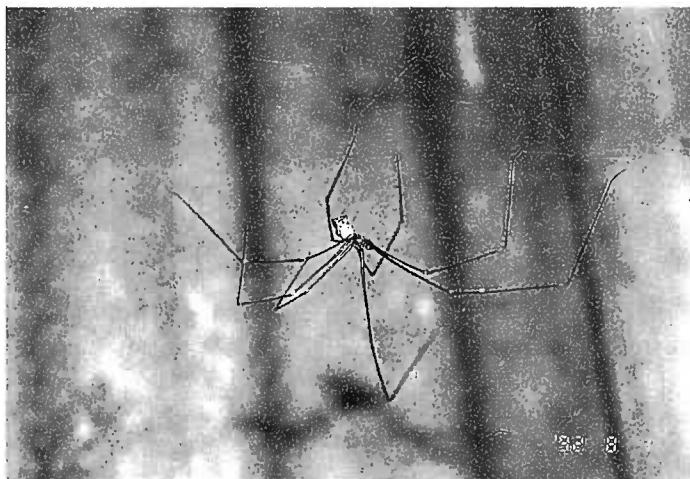


写真1 オダカユウレイイグモ

もともと日本に生息しなかつたこのクモが、いつ頃どのようにして入ってきたのだろうか、という疑問が湧いてくる。そこで、私は次のような仮説をたててみた。つまり、一九六〇年頃からの日本の高度経済成長に伴って貿易が盛んになり、さまざまな品物が日本と多くの国々の間を往来するようになった。そのような中、東南アジアの各国から輸入される穀類などの家畜用飼料の原料とともに、オダカユウレイイグモは日本に入ってきたのではないかと考えた。その証拠は、愛知県での最初の発見場所が飼料工場内で、その後も飼料と関係の深い港などから発見されているからである。もちろん、飼料の流通経路からだけではどうしても説明できない例外もあるが、まず港と製粉および飼料工場とそれらの倉庫を調べてみるとこととした。

熊本市やその近郊で使用される家畜用飼料は、原料の状態でまず八代港と博多港に陸揚げされる。その後、各港の飼料工場において数種の原料がブレンドされ、県内十数か所の飼料基地に家畜用飼料として運ばれ、一時保管される。この基地から、必要に応じてJA(農協)や小売店、さらに各畜産農家へと運ばれて行く。これらの運搬には、飼料を専門とするトラックやバルク車と呼ばれる専用車が使われる。

オダカユウレイイグモは、港や製粉工場と倉庫からはもちろん、運送会社やJAの倉庫、最近ではスーパーマーケットからも見つかっている。どうも、オダカユウレイイグモは東南アジアから日本の港に入ってきただけでなく、飼料を運ぶ専用車を仲介者として、その分布を広げつつあるようだ。スーパーや食堂、弁当屋などから本種が発見されているのも、飼料とは別の製粉工

場のルートを通って、穀類や食料品を運搬する車を介して、分布を拡大したためと考えられる。熊本市動植物園からも、オダカユウレイグモが一九九一年に見つかった。これらのクモは、東南アジアから持ち込まれる動物たちに混じって移入されたのではないかと最初考えた。その後調べていくうちに、動物たちの飼料を運ぶための運搬車によって持ち込まれたことが判明した。

ここで、どうしても説明のつかないルートを持ち上がってきた。それは、輸入港との接点がみつからない精米工場内、民家の車庫の中、またはある橋と橋桁との間などからもオダカユウレイグモがみつかってきたことである。当然、精米工場と飼料工場および製粉工場との接点も探つてみたが、今のところこれらを結ぶものは分からぬ。

ところが、意外なところに一つだけ接点がみつかった。それはハトである。ハトは、飼料工場や製粉工場を除くいずれの場所からも確認されている。特に、車庫ではシャッターの開閉ができる今までにすみ着いていたことがある。飼料工場と製粉工場の場合、ハトは衛生上何らかのかたちで除外されているようだが、全く寄りつかないことはないと思われる。もし、ハトがオダカユウレイグモの分布の拡大に一役かつているとすれば、車庫や橋などからオダカユウレイグモが発見されるのもうなずける気がする。ただし、実際にハトがオダカユウレイグモの分布に関係あるかどうか、もつと詳しく調べてみないと断言できない。

最近になって、興味あるクモの写真を入手した。オランダのライデン博物館に残っている三枚のクモの絵で、熊本大学理学部の山口隆男先

生のご好意により、写真で鑑定することができた。

この絵は、シーボルトが来日していた時代（一八二三～一八二八）に、日本人の画家川原慶賀が描いたものとされている。「ヘウトリコブ」（現在のハエトリグモ）、「ジョロウコブ」（現在のジョロウグモ）と「アシナガコブ」の名が記入された絵である。「アシナガコブ」の絵（写真3）には、一匹のクモが描かれている。いずれのクモも、当時のなかその周辺でいつも見ら

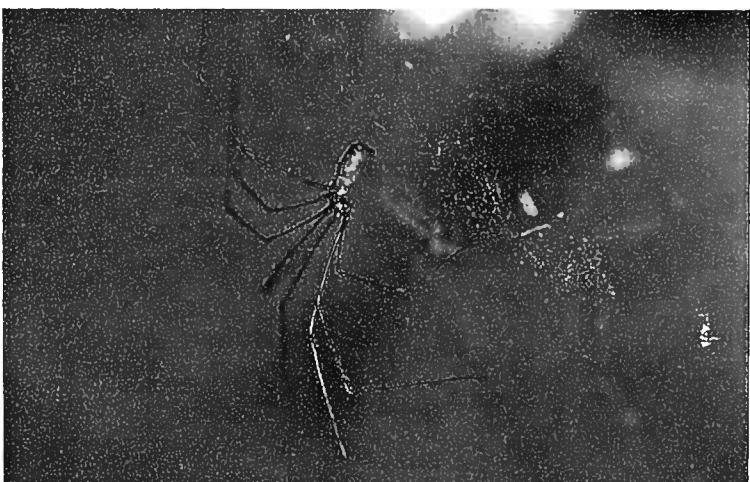


写真2 イエユウレイグモ

平成七年後半

日誌抄

第三十五回原始・古代専門部会（史料編
「考古資料」の原稿構成）

現代史料調査（通史編「現代」）編集項目、執筆担当調整

近世史料調査（史料編「近世II」）収載史料の校訂結果

自然史料調査（植物分野担当打ち合わせ）
第三十三回民俗・文化財専門部会（別編）

「民俗・文化財」の執筆・収載写真構成

近代史料調査（史料編「近代」）収載史料採択

近世史料調査（島田美術館）

第二十八回中世専門部会（通史編「中世」）編集

自然史料調査（動物分野担当打ち合わせ）
近代出張調査（東京都防衛研究所）

近世史料調査（熊本大学永青文庫）

第三十六回原始・古代専門部会（史料編「考古資料」の原稿構成）

民俗・文化財史料調査（新聞史料検索、別編「民俗・文化財」の口絵写真調整）

近代出張調査（福井市横井小楠研究会）

現代史料調査（通史編「現代」）項目検討、執筆担当調整

民俗・文化財史料調査（写真撮影）

近世出張調査（神戸市、兵庫県御津町）

第三十四回民俗・文化財専門部会（別編）

「民俗・文化財」の執筆・収載写真構成
自然史料調査（植物分野担当打ち合わせ）

（写真3）には、一匹のクモが描かれている。いずれのクモも、当時のなかその周辺でいつも見ら

れた。

（写真3）には、一匹のクモが描かれている。いずれ

のクモも、当時のなかその周辺でいつも見ら



写真 3 オランダのライデン博物館に残っている
クモの絵の一つ。日本人画家川原慶賀作

れるクモだとすれば、生息環境から考えて「アシナガコブ」は現在の「アシナガクモ類」ではなく、家の中で現在もよく見る「イトグモ」(写真3、左側のクモ)と、その近くで普通に見られる「イエユウレイグモ」(写真3、右側のクモ)となる。しかし、腹部の形から判断して後者は「イエユウレイグモ」には見えない。私には、「オダカユウレイグモ」に見えてくる。もし、このクモが「オダカユウレイグモ」とすると、すでに江戸時代あるいはそれ以前に、日本と交易のあった国々の船や積み荷が、東南アジアを経由して運ばれるとき、一緒に長崎に侵入していくものと推測され、非常に興味深いこととなる。

一月八日、冬の生息状況を、ある精米工場に見に行つた。オダカユウレイグモの死んだ個体

もかなり見られたが、雌親と幼体の生きた姿を確認できた。彼らは、日本の冬を何とかクリアしながら、したたかに生きのびていることがわかつた。

オダカユウレイグモが侵入している場所は、

もともとイエユウレイグモがすむ環境である。

オダカユウレイグモは、帰化グモとして、新しい環境になじみ、イエユウレイグモとの共生を続けながらも、今後分布を広げていくものと思われる。むしろ、イエユウレイグモの生活を脅かしていく可能性がある。同じく、悪評高くなつた毒グモ・セアカゴケグモも、同じ生活環境にある在来のヒメグモの仲間たちと共に生しながらも分布の拡大を図り、定着していくに違いない。

これも生物の世界の定めであろう。

- 新熊本市史・市史編さんだよりについてのご意見、ご感想をお寄せください。
- 皆さんの身近に「史料」がありましたらご提供をお願いします。

〒860 熊本市手取本町1-1
熊本市市史編纂課
☎096-328-2038

9 ·	9 ·	9 ·	9 ·	9 ·	9 ·	8 ·	8 ·	8 ·	8 ·
25 ·	20	13	12	12	10	31	30	28	22
↓		↓	14						

料採択)	近代史料調査(史料編「近代」)収載史料	中世史料調査(通史編「中世」)の編集	I」目次項目構成、ページ数割り振り
現代史料調査(通史編「現代」)目次調整、執筆担当割り振り)	民俗・文化財史料調査(別編「民俗・文化財」)の原稿・写真、方言の扱い検討)	近世史料調査(史料編「近世II」)収載史料の原本照合)	第二十五回自然専門部会(通史編「自然・原始・古代」原稿構成)
原始・古代史料調査(史料編「考古資料」の原稿調整)	自然史料調査(動物分野担当打ち合わせ)	民俗・文化財史料調査(別編「民俗・文化財」)の原稿・写真、方言の扱い検討)	民俗・文化財史料調査(京町、花畠、指
民俗・文化財史料調査(田迎、渡鹿、指定文化財調査、写真撮影)	近世史料調査(植物分野担当打ち合わせ)	近世史料調査(史料編「近世II」)の章節組み替え、史料外題決定)	定文化財調査(植物分野担当打ち合わせ)
民俗・文化財史料調査(花畠、龍田、指定文化財)の原稿・写真の調整)	現代聞き取り調査(からいも文献上者)	立候補者)	現代聞き取り調査(からいも文献上者)
現代出張調査(石巻市、仙台市)	自然史料調査(動物分野担当打ち合わせ)	近代史料調査(史料編「近世II」)の章節組み替え、史料外題決定)	自然史料調査(動物分野担当打ち合わせ)
民俗・文化財史料調査(別編「民俗・文化財」)の原稿・写真の調整)	近代出張調査(動物分野担当打ち合わせ)	民俗・文化財史料調査(花畠、龍田、指定文化財)の原稿・写真の調整)	民俗・文化財史料調査(花畠、龍田、指定文化財)の原稿・写真の調整)
現代聞き取り調査(からいも文献上者)	自然史料調査(動物分野担当打ち合わせ)	立候補者)	立候補者)
自然史料調査(動物分野担当打ち合わせ)	近代史料調査(史料編「近世II」)の章節組み替え、史料外題決定)	民俗・文化財史料調査(花畠、龍田、指定文化財)の原稿・写真の調整)	民俗・文化財史料調査(花畠、龍田、指定文化財)の原稿・写真の調整)
近代出張調査(東京都 東京大学ほか)	民俗・文化財史料調査(別編「民俗・文化財」)の原稿・写真の調整)	立候補者)	立候補者)

河尻神宮祭典考



民俗・文化財専門部会
西 輝 喜

昔から熊本の三大祭りは「祇園（北岡神社）放生会（藤崎八幡宮）飽田（河尻神宮）の祭り」と言われている。

川尻の町は今から約八〇〇年前の建久の初め河尻三郎実明が河尻莊の地頭職に補せられ、河尻城を構えたところである。細川藩時代には肥後五ヶ町の一つで町奉行所が置かれ、藩の軍港、また商港として栄え、由緒ある史跡が多い。その誇りとするものに河尻神宮がある。

河尻神宮は河尻実明が尊崇する鎌倉鶴岡八幡宮を勧請したと伝えられ、若宮の称がある。また港町にふさわしい航海安全の住吉大神など四大神も合祀するので若宮五大明神ともいう。

河尻神宮は一町八十七村の総氏神であり、昔の祭りは加藤、細川氏と武将が一切を奉納されたが、明治に入つてから氏子が年行司として持ち回りとなつたという。つまり一町の川尻町を除いた八十七村を十四の組に分け、一年ごとに輪番で年行司を受ける仕組みである。

年行司の諸役員は神殿における行事のほか、流鏑馬・飾馬・提灯行列などの行事を担当する。従つて祭りの何ヶ月も前からハッピ、提灯の注文、馬の借用から乗馬訓練の世話、さらに食事の手配



河尻神宮で披露される大渡の獅子舞い

11 · 13	11 · 8	11 · 1	10 · 31	10 · 26	10 · 25	10 · 23	10 · 17	10 · 14	10 · 5	10 · 7	10 · 3	10 · 2	9 · 28	9 · 26
---------	--------	--------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

- 等万般の苦労を伴う。各戸も出費を要求される。しかして十四年に一回の氏子が神に奉仕できるハレの機会であり、全戸が積極的に取り組んでいる。
- 川尻町では風流、獅子、鉾を奉納するのが藩政時代からの仕事であった。鉾は各町内で備えていた。古記録によると、十月十九日の祭礼には、重い鉾を担ぐ十人の若者たちを天草などから雇い入れていて。町内の世話役
- 近世出張調査（滋賀県水口町・土山町）
民俗・文化財史料調査（坪井 刀剣計測写真撮影）
市史編纂委員会視察研修（横浜市、鎌倉市、神奈川県二宮町）
民俗・文化財史料調査（藤崎八幡宮 刀剣計測写真撮影）
民俗・文化財史料調査（年中行事）
自然史料調査（動物分野担当打ち合わせ）
／植物分野担当打ち合わせ
第四十回部長会議（各部会の進行状況、部会間の調整）
民俗・文化財史料調査（本妙寺 刀剣計測、写真撮影）
第三十五回民俗・文化財専門部会（別編「民俗・文化財」の編章節・写真の構成）
中世出張調査（宇佐市、豊後高田市）
近代史料調査（史料編「近代I」収載史料採択）
第三十五回近世専門部会（史料編「近世」）

は麻袴姿で、担い手を白張に白丁鳥帽子装束に仕立て奉祝していたという。

しかし戦時の担ぎ手不足、金属類の供出、戦後の管理不充分等で殆どなくなっている。今新調すれば二、三千万円はかかる豪華なものである。それだけのものを飾れる経済的実力が嘗ての川尻の町方衆にはあったのである。現在あるのは寛政六年(一七九四)に作製された横町の鉢(昨年までくまもと工芸会館に展示)と本田町、岡町の三つだけであるが、奉納されているのは台車に載せた本田町だけである。

風流の始まりは慶長十九年(一六一四)国主加藤忠広のときとされ、新町の染物屋「原田染林堂」が代々太夫を務めている。昔の稚児数やその服装の変遷はあるが、現在の稚児数は七名で服装は神童が赤熊に直垂姿で帶刀し、小太鼓を胸に下げ、足は白足袋という出立である。他の六名は一文字笠を被り狩衣装束となる。行列は小鉢、太夫、稚



残る本田町の鉢

児、世話役の順で新町を十時に出発し、街を練り歩き河尻神宮へと向かう。

お宮では飾馬の朝詣、下がり馬などの馬行事が終わると風流となる。行列は拝殿から幣殿へと進み着座する。神官、禰宜の祝詞、お祓いのあと太夫が「拍子言」をとなえると稚児たちは調子をつけて「歌口」をうたう。この歌に合わせて神童は胸に掛けた太鼓をたたき座の内側を三回舞い回つて所作を終わる。

祭りの一つのハイライトは大渡の獅子舞いであろう。由来は天明八年(一七八八)難工事の完成を祈願して獅子舞いを神宮に奉納したのが起りとされている。

祭りの月の初日、つまり十月一日の「ハタアゲ」の朝、町内の入口に昇り旗(幟)数本を立て「奉納」と印の入った七個の大提灯を町内の要所に配り軒先への挂灯を依頼する。従つてこの日から十九日まで町は祭り一色に包まれ夜は獅子舞の稽古が始められる。

獅子は雄二、雌二、子獅子二の六頭で四種の舞いを四十分かけて披露する。舞いの特徴は荒獅子であり、特に最後の「イサミ」は四頭(八人)の勇壮な舞いで観衆を魅了するものである。

神祭りは時代とともに変わる。川尻町では鉢に代わって昭和三十年代より神輿が登場している。神祭りは神事であるとともに地域社会の団結と親睦の場であり、氏子間のふれあいの場である。祖先が創ったこの生活の知恵は尊い遺産として形こそ変わっても永遠に引き継いでいかねばならない共同社会生活の基本であろう。

II 収載史料の外題 印刷校正

現代史料調査(通史編「現代I」執筆調整)

第二十一回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会出席(和歌山市)

近世出張調査(富山市)

自然史料調査(植物分野担当打ち合わせ)

第十七回市史編纂委員会(各専門部会事業経過報告)

近世史料調査(史料編「近世II」集会校正)

自然史料調査(動物分野担当打ち合わせ)

近世史料調査(史料編「近世II」集合校正)

民俗・文化財史料調査(別編「民俗・文化財」の収載史料・写真調整ほか)

第四十四回近代専門部会(史料編「近代I」収載史料探査)

第二十七回自然専門部会(通史編「自然・原始・古代」の編集)

近世史料調査(史料編「近世II」集合校正)

第二十九回中世専門部会(通史編「中世」編集)

第三十五回原始・古代専門部会(史料編「第三十七回原始・古代専門部会(史料編「第三十五回現代専門部会(通史編「現代I」収載写真、図表などの構成)

近世史料調査(史料編「近世II」集会校正)

第四十一回部会長会議(部会間の調整)

第三十七回原始・古代専門部会(史料編「考古資料」の口絵・付図構成)

近代史料調査(史料編「近代I」収載史料探査)

第三十五回民俗・文化財専門部会(別編「民俗・文化財」の収載原稿・写真構成ほか)

25、27 近世史料調査(史料編「近世II」集会校正)

中世史料調査(仏神像収集史料整理)

新熊本市史 刊行年次計画

既刊本は市内主要書店で
お求めください

通 史 料 編 別 編		既刊
	名	発刊年月
史	第1巻 自然・原始・古代	9
	第2巻 中世	9
	第3巻 近世I	10
	第4巻 近世II	12
	第5巻 近代I	9
	第6巻 近代II	12
	第7巻 近代III	14
	第8巻 現代I	8
	第9巻 現代II	10..
料	第1巻 考古資料	7 ※
	第2巻 古代・中世	発売中(3,700円)
	第3巻 近世I	発売中(3,700円)
	第4巻 近世II	7 ※
	第5巻 近世III	9
	第6巻 近代I	8
	第7巻 近代II	11
	第8巻 現代	発売中(3,700円)
	第9巻 新聞 上 近代	発売中(3,700円)
別編	第1巻 絵図・地図	発売中(10,300円)
	第2巻 民俗・文化財	7 ※
	第3巻 年表・索引	14

既刊

※近日発売予定

田瀬武義（京町二丁目）、森清次郎（京町二丁目）、安藤史郎（京町二丁目）、中島澄（御幸畠田町）、佐々木光雄（田崎本町）、岡村良一（帯山五丁目）、大田黒辰昭（平成二丁目）、西田勇（田迎町田迎）、本田明（平田二丁目）、泉洋一郎（大江六丁目）、松本一清（河内町野出）、末永浩通（坪井一丁目）、中村義親（河内町岳）、東謙一（田迎町出仲間）、米野謙一（花園三丁目）、杉本繁喜（河内町東門寺）、鈴木陽子（京町本丁）、岡本恭典（花畠町）、三浦信也（渡鹿五丁目）、小松聰明（水俣市）、植村元（富山市）、大分県立図書館、神戸市文書館、御

津町立至津民俗館、防衛研究所図書館、宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、徳富蘇峰記念館、東京市政調査会図書館、東京大学明治新聞雑誌文庫、土山町立歴史民俗資料館、土山宿本陣、富山市立郷土博物館、奈良国立文化財研究所、永青文庫、江月院、本妙寺、代繼宮、大慈寺、藤崎八幡宮、安國寺、宝積寺保存会、聖徳寺、J.T.熊本原料工場、熊本大学附属図書館、県立図書館、鳥田美術館、熊本県開拓事業農業共同組合連合会、尾跡公民館、熊本市統計課（敬称略、個人の住所は調査日の表示）環境緑化課、市立図書館

（敬称略、個人の住所は調査日の表示）

津町立至津民俗館、防衛研究所図書館、宇佐風土記の丘歴史民俗資料館、徳富蘇峰記念館、東京市政調査会図書館、東京大学明治新聞雑誌文庫、土山町立歴史民俗資料館、土山宿本陣、富山市立郷土博物館、奈良国立文化財研究所、永青文庫、江月院、本妙寺、代繼宮、大慈寺、藤崎八幡宮、安國寺、宝積寺保存会、聖徳寺、J.T.熊本原料工場、熊本大学附属図書館、県立図書館、鳥田美術館、熊本県開拓事業農業共同組合連合会、尾跡公民館、熊本市統計課（敬称略、個人の住所は調査日の表示）環境緑化課、市立図書館

史料調査にご協力いただいた方々

（平成七年七月～十二月）

編集後記

▼熊本市は、四市と友好・姉妹都市の縁を結んでいます。この中で最も新しくかつ唯一国内にある姉妹都市（平成六年十一月締結）が福井市です。この縁結びに大きな役割を果たしたのが、幕末から明治維新にかけて活躍した大思想家横井小楠でした。小楠は福井藩主松平春嶽（慶永）に請われ藩政改革にあたり、大きな成功を収めています。

▼今回の編さんだよりには、小楠の長男時雄を始めとする横井家の人々の思い出を、小楠のひ孫である横井和子様からご寄稿いただきました。貴重な写真などの史料も多数お貸しいただいています。次号以降に続きを掲載しますので、楽しみにお待ちください。

▼昨年からパソコンホームページが続き、あつという間にインターネットが日常的な言葉になりました。電子化が進んで、全国の珍しい史料がいながらにして検索、閲覧できるようになる日も、そう遠くないかもしれません。熊本と全国各地との交流が一層明らかになるでしょう。

▼人間の幸せの条件の一つに「教養と文化」があるといわれています。この四月から中核市となる熊本市。夏目漱石來熊百年の催しや後藤是山記念館オープニングも間近に控えています。未来へ大きく一步を踏み出すにあたって、改めてふるさとの歩みを見直すいい機会といえるでしょう。「新熊本市史」を多くの市民の皆さんのが手にし、読んでいただけることを願っています。